大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

外部人材による支援が学習活動に及ぼす影響：情報発信を中心とした授業実践を事例に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-08-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西森, 章子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004718

外部人材による支援が学習活動に及ぼす影響
～情報発信を中心とした授業実践を事例に～

西　森　章　子

1. はじめに

2002年（平成14年）の4月から、全国の公立小・中学校において「総合的な学習の時間」が時間割の中に設置される予定である。これにより公立校は独自の学校カリキュラムを開発・実施し、そのカリキュラムによって何が達成されたのか、独自の評価の枠組みを作成することなど、これまでになく創造的であることが求められるようになった。現段階（2001年）は新しいカリキュラムへの移行期間にあたり、「総合的な学習をどうするか」は、公立校に勤務する教師達にとって関心の高いトピックである。

「総合的な学習」の特徴が「子どもの活動を中心にした学習」であるならば、これまでの我が国における教育および学習の歴史の中で、同様の学習が検討されてこなかったかというと、そうではない。大正時代の自由教育運動をはじめとして、子どもの活動に即した授業を目指す試みは、常になされてきている。しかしこれらは私立学校や高等師範の付属校で展開されていた。その他では、学校独自や教師独自の取り組みとしても展開されていたという経緯もあるが、公教育全体のなかで、公的カリキュラムの一貫として「子どもの活動を中心にした学習」が議論されているというところは特色である。

現実の教授―学習場面に即して、「子どもの活動を中心にした学習」について考えると、多様な学習形態の可能性が開かれている。教師が一人で数十人のクラスを指導するといった形態に対して、学習者個人をベースとしてその学習を指導していくといった形態もある。またいくつかのクラスを連結させ、グル

ープをベースにして展開される学習活動もありえる。そうすると指導組織のありかたも学習活動に連動して柔軟な構造を持ったものにならざるをえない。もちろん一人の教師が個々の子どもの学習活動の展開過程をモニタリングしていくこともあれば、複数の教師（学年や教科の担当の関係から）がティームを組んで、子どもの学習活動に働きかけるという場合もある。また、学習内容によっても学校の教師のみで指導することが可能な場合もあれば、学校外の専門家（外部人材）に指導を依頼する必要性が生じる場合もある。従って指導組織が、時と場合に応じて変化することもある。

大阪府ではこのような情勢を踏まえて、教育委員会が主体となって人材バンクを設置している。そこでは、登録された外部人材を学校の要請に基づいて派遣するなどの支援が行われている。

2. 授業実践（学習単元）の概要

「総合的な学習」を、子どもの体験を基にして、その体験の中から知識・理解および判断力等を養っていく場ととらえるのであれば、その体験が子どもにとってどのような「意味」を持つのかは授業の設計場面、実施場面、評価場面において注意深く検討される必要がある。例えば子どもの体験と現代社会で必要とされるスキルとのつながりが意図され、そしてその体験は可能な限り「豊か」であることを目指すべきである。また「豊か」であるためには、できるだけ「本物」の体験が必要となる。

そこで筆者らは、「本物」の体験が「外部人材」との協働的指導組織によって生起することを目指し、ある一つの授業実践の枠組みを考えた。それは新聞というマスメディアを教育の場において利用し、マスメディアによって情報発信していくといったものである。この授業実践において、留意したのは次の点である。

まず一つに、「新聞を作る」という学習活動に「本物」を求めたことである。

西森ら（2000年）が全国の新聞利用校（小学校33校、中学校34校）の教師

262名を対象として実施した調査の中で、新聞を用いた授業の内容（授業事例数は103）について調べたところ、教科によって多少の違いはあるものの、新聞記事を完成されたもの、正しいものとしてみなして、「記事紹介をする」「話し合いをする」「調べることの材料にする」といった活動が多くを占めていた。これらは佐賀（1998年）によるメディアと学習目標との関係の整理に従うと、第一の事態「メディアによる学習（learning by media）」に当てはまると思われる。これに対して第二の事態「メディアを通した学習（learning through media）」や第三の事態「メディアについての学習（learning about media）」、すなわち、新聞記事を一つの手だてとして（批判的に）用いながら学習課題に取り組む、または新聞制作の過程を学ぶなかでそのルール等について学ぶといった活動が主となる授業実践は、現段階では非常に少ない。これは、新聞とは何か、新聞を制作するうえでのルール、情報とは何か、情報の獲得方法等の専門的な知識を、学校や教師は一般的では持ちえないことが原因の一つではないかと思われる。

そこで、本稿で取り上げる授業実践では、新聞記者（記者としての経験を有する人材、以下外部人材）の協力を得て、教師と外部人材が協働的に指導にあたることによって、「本物」の体験が構成されていくことを目指した。

現実には、授業実施にあたって学校教育の理念と、新聞社および新聞記者の理念とは一致しない部分が存在する。例えば、本来ならば取材活動および記事原稿の執筆は記者が単独に行うが、今回の場合は14のグループに分かれて進められることとなった。一連の学習活動を表1に示す。授業実践は、H県内の公立小学校6年生の2クラス（74人）において、平成11年2月から3月にかけて行われた。「校区再発見新聞を作ろう」という単元名のもと、児童が新聞記者の修業をしながら新聞記者になり、自分たちの学校の周辺（校区）について調べ、調べた結果を新聞記事として書くといった流れで実施された。担任は男性教師と女性教師の2名で、これら教室教師が指導にあたった。本稿では授業を計画した男性教師を主たる「教室教師」として扱っていく。

表1：学習活動・展開のようす

	学　習　活　動	外部人材の指導	時数
(1)問題設定	A.記事を分類しよう B.記者や編集者の工夫を探そう	－ －	1 1
(2)展　開 ①情報収集	C.新聞記者から教わろう	○記者の仕事 (E氏･Y氏)	2
	D.取材のテーマを考える	○テーマ選択のアドバイス(E氏)	2
	E.テーマ決定 E.テーマと方法、グループ決め	－	2
	△.外部人材の意見を聞く △.テーマ決定、計画立て	○テーマ･グループ決定アドバイス FAX支援(E氏)	2
	F.取材に出かけよう(1回目) F.記事を書く(1回目)	－	3
②情報選択	G.外部人材の意見を聞く G.計画立て	○1回目取材記事について指導(E氏)	2
	H.再度取材に出かけよう(2回目) →記事を書く	○Y氏による取材	2
	I.再度取材に出かけよう(3回目) →記事を書く	－	4
	△.記事の修正、清書	－	2
③情報構成	J.編集の実際を見る、できた新聞を見る、見出しをつける	○編集の実際、見出し付けについて指導(E氏･Y氏)	2
④評　価 (省　察)	K.新聞記者体験について反省する(作文を書く)	－	2
	L.感想をまとめる	－	1

このような学習活動をすすめていく場合に問題になるのは、特定の専門的知識を有している外部人材と、教育の専門家としての知識を有している教師（以下教室教師）との協働のありかたである。専門家を教室に招く場合、多くは講話のようなものになりがちである。しかし今回の場合は、外部人材も教室教師と同様に、それぞれのグループの活動状況やその取材内容等に積極的に働きかけることが求められる。そのような場合、実際に外部人材はどのような働きかけを行っていたのか、教室教師の働きかけとはどの部分が異なるのか、また外部人材による働きかけを子ども達がどのようにとらえたか（利用したか）などについて考察する必要があるだろう。その考察から、異なる職能を有する二者からなる協働的組織のあり方について検討することが可能になると考えられる。

なお、筆者と教室教師の関係は以下のようになる。筆者を含む研究グループが授業実践に関するアイディアを考え、それを教室教師に提示した。そしてそれをもとに教室教師が子どもの様子および学習環境を考慮にいれた授業実践案を作成した。不都合な部分や細かい修正等については、途中で話し合いながら手直しするという過程を辿った。

3. 研究の目的と手続き

3-1. 研究の目的

以上をふまえ、外部人材（新聞記者）による指導が、学習活動に及ぼした影響について明らかにする。そのために、以下の手続きをとる。

①外部人材の指導（働きかけ）の特徴を、発話カテゴリーの分布から明らかにする

②その指導によってグループが、どのような学習活動を展開したのか、明らかにする

③「教室教師から見た外部人材による指導」を、教室教師へのインタビューから把握する

これによって、異なる職能を有する人間同士が学習指導にあたる場合に、外部人材に期待できる役割および教室教師に期待される役割が示されることになろう。なお、14の活動グループはそれぞれ3人から8人の児童から構成されている。グループによってその性格が異なると予想されるので、本稿では、事前テストの結果から、それぞれのグループの性格をおさえておくこととする。

3-2. 事前テストの実施

グループの性格をとらえるために、授業実践開始前に実施した事前テストの結果を用いる。特に同テストが個々の児童の①教科学習への積極性、および②情報への積極性を調べることを目的としたものであったので、これら2つを統合して学習活動に対する「積極性」をひとつの基準とした。

全体の得点分布を見て、上位20パーセントに属している児童を、学習活動に対し「積極性」の「高い」児童、下位20パーセントに属す児童を「積極性」の「低い」児童と判断した。また中位に属する児童は「積極性」が「平均的」であるとした。

グループを構成する児童それぞれに上記の判断を行い、最終的にグループのメンバー中で積極性が高い児童が過半数を占めているグループを「高積極性が予想されるグループ」、逆に積極性の低い児童が過半数を占めるグループを「低積極性が予想されるグループ」、その他のグループを「平均的積極性が予想されるグループ」とした。結果を表2に示す。

3-3. ターゲットとした授業場面

ターゲットとした授業場面は、授業実践開始から8日目にあたる12・13時間目である（表1の網掛け部分）。10・11時間目で第一回目の取材を終えた児童たちは、試みで第一次原稿を書いた。そしてその原稿についてどこを直すべきか、また今後予定されている取材活動をどうすればよいかなどを外部人材に相談し、その指導を受けるという場面であった。

表2：各グループについて

高積極性が予想されたグループ	平均的積極性が予想されたグループ		低積極性が予想されたグループ
2班（糖分の取り過ぎに注意、男子4人）	1班（鍋物のおいしい季節です、女子7人）	10班（あっこんなにもお年寄が、女子3人）	12班（飼い主にも問題あり、女子4人）
7班（自然を残そう、男子4人）	4班（牛のいろいろ大発見、女子4人）	11班（足や目の不自由な人たちにとって、女子7人）	
	5班（とんぼのふるさと建設中、男子5人）	13班（火事は危険/平和な町に、男子9人）	
	8班（もっと釣りを楽しもう、男子9人）	14班（五ヶ井川はゴミ箱、男子10人）	
	9班（犬を捨てないで、女子3人）		

表3：分類のためのカテゴリー

カテゴリー	内　　容	具　体　例
トピック関連	各班の取材テーマに関わることば ⇔作成した新聞のタイトル、内容	お年寄、ゴミ、川、歴史
具体的表現1（人　　名）	人を具体的に指す	○○先生、○○さん、
具体的表現2（地名・組織名）	場所、組織を具体的に指す	K市役所、R小学校 ○○寺、○○公園、○川
抽象的表現	具体的表現よりは抽象度の高いことばを指す	人 専門家 場所 時間
取材活動	新聞記事を作っていくうえで注意・考慮すべき事柄に関することば	記事、取材、読者、新聞、情報、アンケート、アポイントメント、テーマ
その他	上記5カテゴリーに入れることができなかったもの	学習活動には無関係なものトピックを話す上で派生したたとえ話

人間が人間に対して働きかけるというときには、ことばや身ぶり、表情などのさまざまな手立てが用いられている。この学習活動は、取材をして記事を書くといった体験を重ねることによって学んで行くことが第一の目標とされているが、外部人材の側から見れば、児童と話し合いながら指導していくということになる。特に何について言及し、何を基にして働きかけを行っていたかということを明らかにするために、言語情報としての働きかけに注目し、カテゴリー分析を行った。このカテゴリーは授業実践の際に映像および音声によって記録されたプロトコル記録から帰納的に作成された（表3に示す）。
また、この指導を受け、その後学習活動がどのように展開されたかについても、グループごとに整理を行った。

4. 結果

4-1. 外部人材の指導（働きかけ）の特徴

以上に述べたカテゴリーを用いて、外部人材が各グループに対しておこなった言語情報としての働きかけを整理した。結果を図1に示す。グラフは、縦軸がことばの頻度、横軸が各グループを示しており、また横軸は同時に時間的経過を表してもいる。つまり、授業実践の12・13時間目において、外部人材は最初に8班、次に11班というふうに指導にあたったのである。また時間的制約からか、「高積極性が予想されるグループ」である7班には働きかけが行われていない。

グラフからは、グループによって言語情報としての働きかけの多いところと少ないところがあるが、必ずそのグループが取り組んでいるトピックに言及しているということがわかる。すなわちそれぞれのグループが追及している内容について、話し合いをしており、個々のグループに丁寧に応じていることがわかる。いわゆる外部人材の専門的知識の代表かと思われる「取材活動」については、それほど大きな割合で言及していない。これは、同様のカテゴリーによって教室教師の働きかけを整理した結果（図2）とは対照的である。つまり教

室教師のほうが、内容そのものには触れず、「取材活動」などの手続き的なことについて児童に話しかけている、および児童と話しあっている割合が高い。また、教室教師は、外部人材が指導できていなかった7班に対しては、「トピック」「具体的地名・組織名」「抽象的表現（人、専門家など）」「取材活動」について、いずれもことばで表現しながら働きかけている。外部人材がどのような順番で指導していくのか、事前に知らなかった場合でも、教室教師が即時的に対応していることがわかる。

図1：外部人材・各班への働きかけ・カテゴリー別

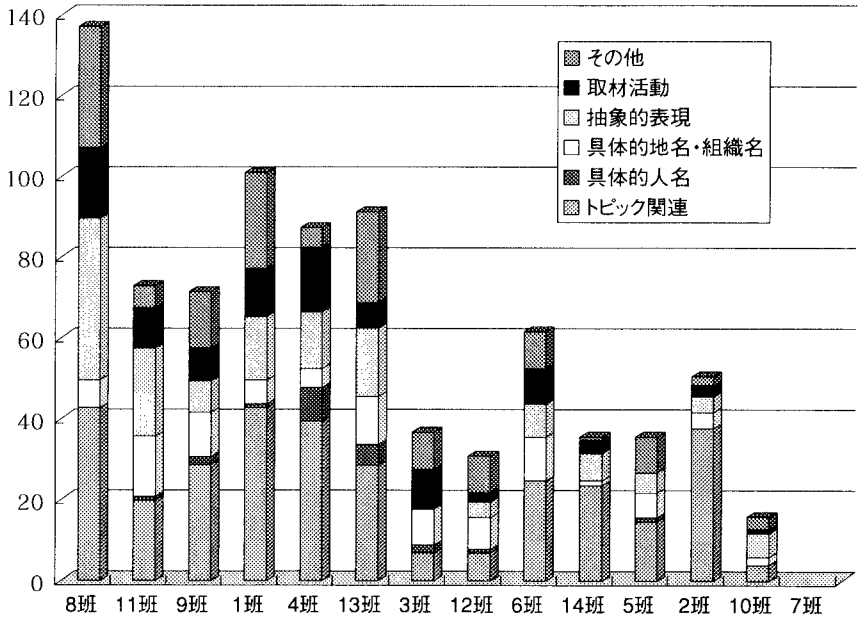
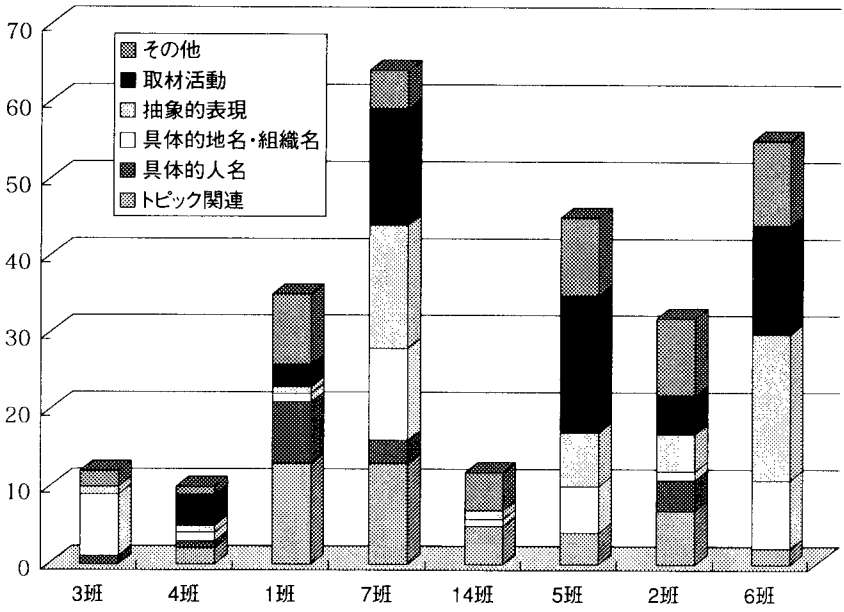


図2：教室教師・各班への働きかけ・カテゴリー別



4-2. 外部人材の指導を受けた後の学習活動

ここでは、12・13時間目の外部人材による指導を受けた児童たちが、その後どのような学習活動を展開したかについて考察する。14の班すべてについてその活動を示すことは難しいので、事前テストの結果から積極性が「高い」あるいは「低い」と予想されたグループについて、その展開を見ることとする。

(1) 高積極性が予想されるグループ・7班の場合

4-1でも述べたように、「高積極性が予想されるグループ」の一つであった7班（トピック：自然を残そう）は、教室教師による指導は受けたものの、外部人材による指導は行われなかった。7班の学習活動プロセスをまとめた図3を見ると、プロセスの前半部分で取材活動はストップしており、その後に設けられていた取材活動は、原稿書き（具体的には挿し絵を描く）となっていた。

授業実践後に筆者が行ったインタビューでは、教室教師はこの班のことを、構成メンバーからみて「活動には積極的に取り組むだろうと予想していた」が、「(もっと発展した活動ができたはずなのにと) 悔いが残る」と表現していた(補足資料1)。

(2) 高積極性が予想されるグループ・2班の場合

同様に2班の学習活動プロセス (図4) を見てみると、このグループは外部人材、教室教師双方から指導を受けている。また2回目、3回目の取材活動は双方からのアドバイスを受けて、学校外および学校内へと取材対象を広げている。

(3) 低積極性が予想されるグループ・12班の場合

逆に、「低積極性が予想されるグループ」であった12班 (トピック：自然を残そう) は、外部人材には指導を受けたが、教室教師からの指導はなかった班である。その後を見ると活動プロセスに広がりが出てくる (図5)。前節でのグラフを見ても、取り立ててこの班に対して外部人材が多く働きかけたわけではないが、働きかけの中にあるアドバイス (道に歩いている人に話しを聞く、獣医さんに電話する等) を2日に分けて実行し、場合によってはグループを分けて取材活動に出かけるということになっている。

7班と同様に、この班についてもインタビューしたところ、教室教師は「積極性が低いとは言えない」としながらも、「予想以上に足で動き回ったので、見直した」と述べている (補足資料1)。

その他のグループも含め、全体的に外部人材による指導を受けた児童たちは、その後の取材活動の幅を拡大していったと見なすことができるが、「なぜアドバイスを受け入れたのか」また「どの程度アドバイスを理解したのか」についてはわかっていない。ただ12班に対する教室教師へのコメントにもあるように、外部人材からのアドバイスが、児童が新しい活動を進める契機になり、それが教師の予想を超えるものとなっている。

図3：高積極性グループ・7班の学習活動展開

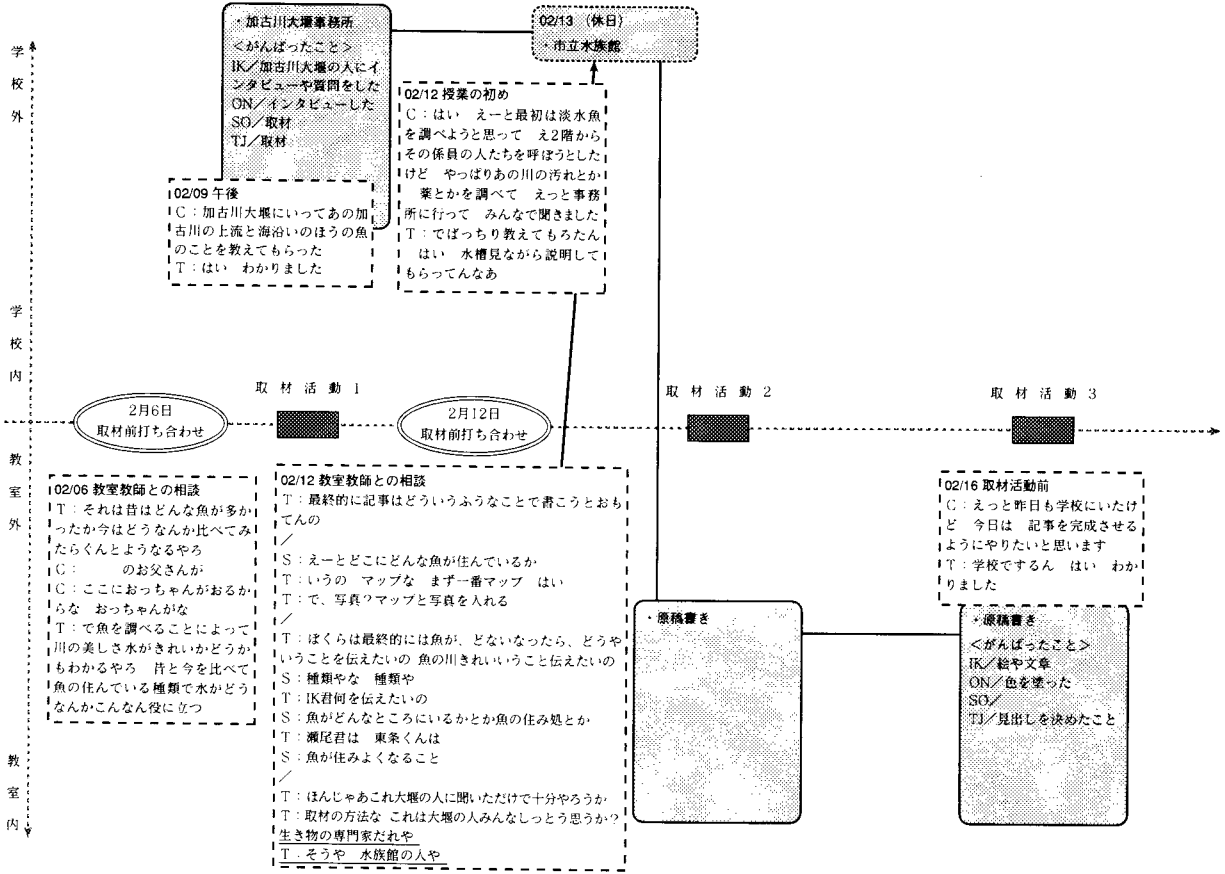


図4：高積極性グループ・2班の学習活動展開

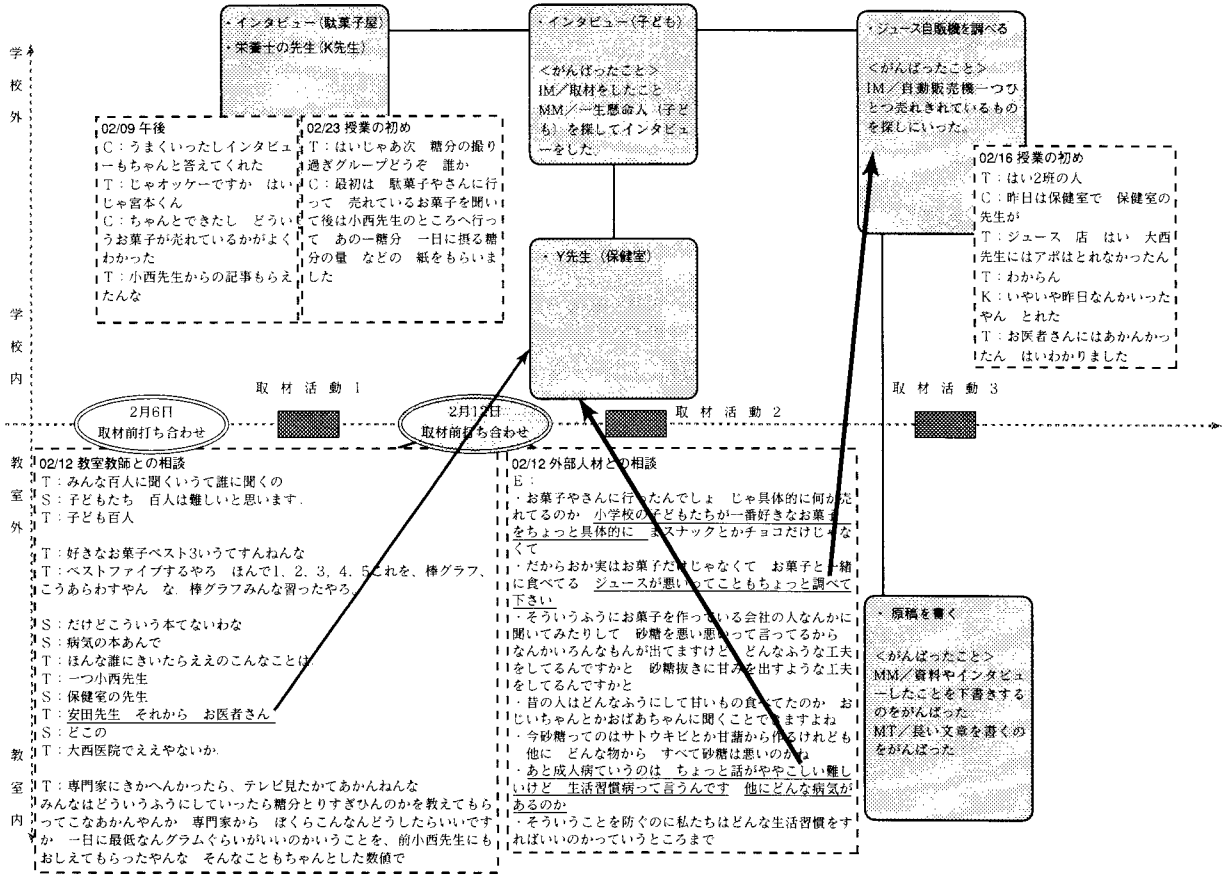
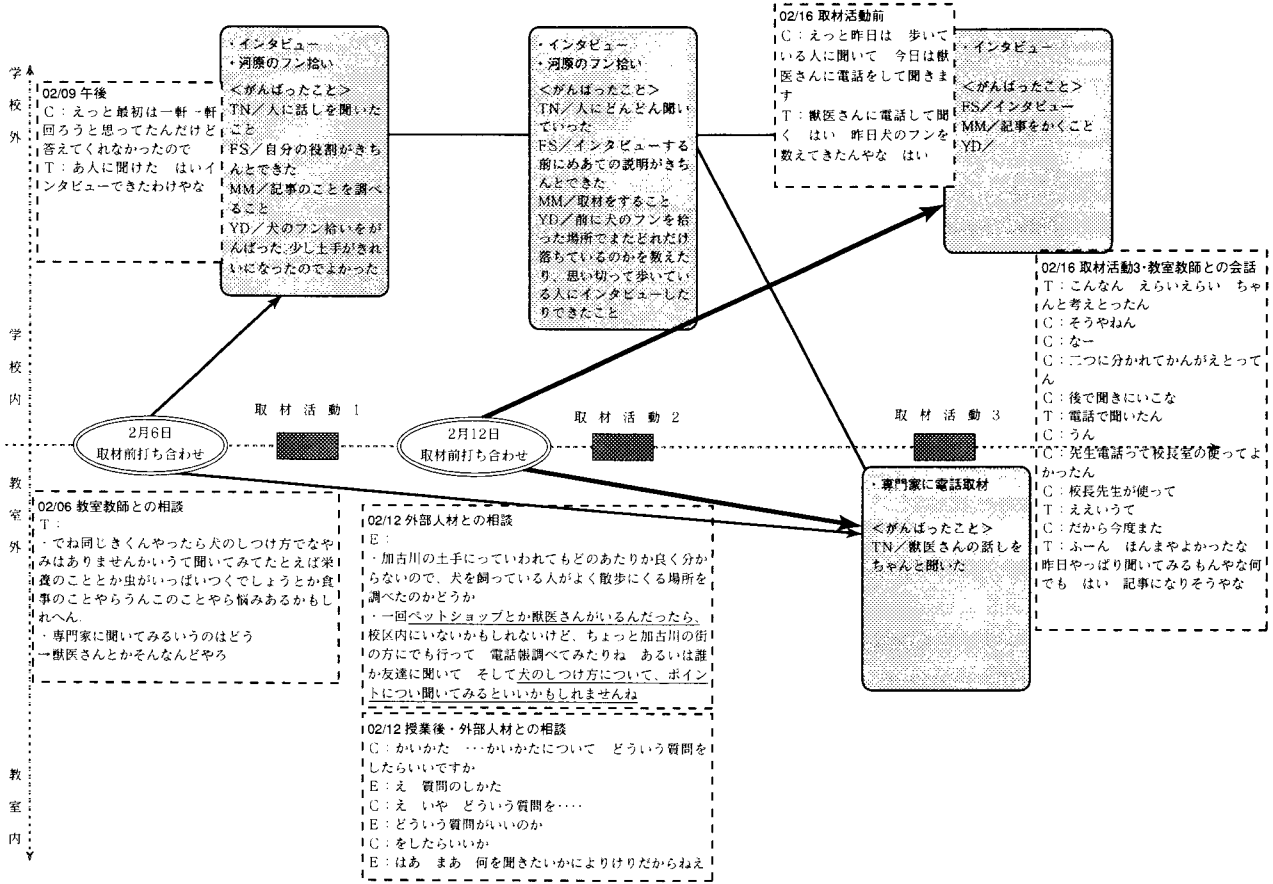


図5：低積極性グループ・12班の学習活動展開



4-3. 教室教師から見た「外部人材による指導」

では、教室教師は外部人材による指導をどうとらえていたのだろうか。既に一部述べたように、筆者は授業実践後に、教室教師に対してインタビューを行った。その内容をまとめたものを表4に示す。これを見ると、教室教師は外部人材から、新聞制作について「教師も子どもも教えてもらう」ことを望んでいるが、その根底には、常に「子どもと関わりがもてるか」どうかということがある。「関わり」という中には、外部人材のする話しが子どもに理解できるということも含まれるし、子どもが相手に対して構えない存在であるかどうかということも含まれている。また、授業が開始してからは、14あるグループのうちのどの子ども（グループ）と、どの程度関わらせるかを考えていたとあるように、教室教師が学習プロセスの中で、子どもと外部人材とを出会わせるマネージャーのような存在でもあったことがわかる。

表4：外部人材と共に指導したことについて・インタビュー記録より

	よかった部分	配慮した部分
はじめに （単元開始以前）	・子どもにも教師にもいい勉強になると思って期待をしていた	・どういう人なのだろうかという心配はあった →子どもとうまくやっていける人だろうか →子どもの目の高さで話しをして下さるのだろうか
つぎに （単元開始直前）	・（E氏）の話の進め方が新鮮だった（授業前の打ち合わせ時と授業中において） ⇔目のつけどころ ・子ども達は話しを聞くだろうと感じた（説得力がある）	
そして （単元が始まって）	・初めの出会いでうまくいけそうじゃないかなと感じた ・頼りがいがあるなあと思った ・できるだけエネルギーを、情報をもらおうと思った ・（E氏）の子どもへの熱心な関わりよう（FAXによる指導など）はありがたく思った ・子どもとのつながり（パイプの結びつけ方）が上手と感じた ⇔以前の授業経験（記者体験、小学校3年生）と比較して	・気を使う部分もあった →どういうふうに関わってもらったらよいのだろう →どの子に関わってもらったらよいのだろう →どの程度（関わりを）お願いできるのだろうか
さいごに （今から思えば）	・第三者が教室に入ることで1足す1が2ではなくて、3にも4にもなったんじゃないかな	

5. まとめ

以上のような授業実践の事例から、外部人材（新聞記者）による指導が、学習活動に及ぼした影響について、普遍的なことを述べることは不可能ではあるが、この事例を通して見えてきたことについて述べる。

各グループへの外部人材への働きかけ、およびその後の学習活動の展開、教室教師から見た「外部人材の指導」に関するインタビュー記録等からは、一つ一つのグループ（子ども）の状況に応じた指導体制を組むことの必要性があらためて強調される。それは外部人材が各グループの追究しているトピックに応じて、専門的なことばを使わずに対応していたことが参考になる。すなわち外部人材にも（指導にあたっては）子どもを理解することが求められる。つまり外部人材の側に学習場面における子どもが何を考え、何に迷っているのかの理解がないと、協働的に指導することは難しいということになる。この点は、教室教師が外部人材に望むことの根底にある「子どもとの関わり」と一致すると言えるだろう。子どもがなぜ外部人材のアドバイスに対し納得したのか、またはそのアドバイスを理解していたのか等の追究はできていないが、外部人材による指導は、少なくともグループの学習活動展開に行動レベルで影響を与えている。

また外部人材による指導は、教室教師の存在やふるまいにも影響を与えることになる。特に外部人材と協働的な指導組織をつくっていく場合、教室教師には、一時間一時間の学習状況を見きわめ、外部人材の補助として即応していく、「サブティーチャー」的な役割と、子どもと外部人材とのマッチングを考えながら両者を引きあわせていく「マネージャー」的役割を持つことになった。従って、このような新聞を作ることを目的とするような学習活動においては、子どもの行動や活動範囲への影響もあるが、専門家との協働を通じて、教室教師にとって役割上の変化を迫ることになると言える。

加古川市立陵北小学校の高谷秀先生および勝川秀美先生には、貴重な授業実践を提供

いただき、また研究についてもご示唆いただきました。ここに深く感謝いたします。

なお、本研究は、日本新聞教育文化財団よりNIE調査研究委員会（代表者：梶田叡一、京都ノートルダム女子大学）に委託された研究の一部であるとともに、平成12・13年度科学研究費補助助成研究（奨励A）「学びの場における協働的指導組織の類型とその影響に関する研究」（課題番号：127801329）に基づくものである。

参考文献

細川和仁・西森章子・浅田匡（2000年）「新聞を活用した授業のデザインと実践」、財団法人「日本新聞教育文化財団」委託『NIE調査研究最終報告書』、pp.55-104、NIE調査研究委員会

西森章子・細川和仁・浅田匡（2000年）「学校教育現場における新聞利用の状況とその学習効果に関する調査研究」、財団法人「日本新聞教育文化財団」委託『NIE調査研究最終報告書』、pp.11-54、NIE調査研究委員会

西森章子（2000年）「外部人材とのティームティーチングが教師の授業予測に及ぼす影響」日本教育工学雑誌、Vol.24Suppl.pp.171-176、日本教育工学会

佐賀啓男（1998年）「メディア教育概念の変遷」メディア教育開発センター『メディア教育研究』、No.1、pp.167-183

補足資料：7班と14班に対する教室教師の認識・事後インタビューより

	最初の予想	プロセスの中で	打てたであろう手だて	現在から見て
7班自然を残そう	・この班に勉強のできる子が固まってしまった ・ここの班は多分やるやろ ・川の上中下流の生き物による川の流れを地図でしめしてくれるんじゃないかというふうに予想してたんです	・水族館へ行ったところまではよかったんだけれどもそこからの発展がなかった ・水族館行った時点で安心してしまったんじゃないかなという気がしますね ・途中でゆるみましたね ・あえて水質検査には挑戦させなかったんだけれどもちょっとまずかったなあ ・検査してもいいかなと思ってたんですよ　それで裏付けするっていうかね　のってこええへんかったね	・押しきれなかった ・ヒントをあげたらよかったのになあ (・水質検査に挑戦させる)	・スタートはよかったんだけれども、僕の描いていたイメージと子どもが描いているイメージとが違っていた ・こっちは魚そのものに興味を持っていた ・この子たちはもっとできる子なのになあ ・悔いが残るんですね
12班飼い主にも問題あり	・はっきり言えばこのグループもよく勉強ができる ・だからこのグループもちゃんとできるだろうと思っていました ・まとめは上手にまとめるんじゃないかなあという予想をしていました ・記事に書ききるというのはこの3人は文章を書くのが上手なんです ・だから安心して見ていられました ・発想がちょっと固いんじゃないかなあと思っていました 図書館に行って資料を集 ・めてきたり、手近なところでちょっとインタビューしてきれいにまとめるんちゃうかなあという不安はあったんです	・フンを集め始めたというのはどこまでやり切るかなと思ってたけど割合たくさんの数を数えてそれを集めて回るというのはそれはやりきったなあとびっくりしました ・割合足で動きまわったのであこれはやるやないかとちょっと子どもを見直しました ・TNさんは外見おとなしいんです　おとなしくてあまり自己主張できない子なのにええすごいやり切るやんと感動しました		・固くなっていかないかなあと思ってたんだけれども　結果的にはよくやってくれたと思いました ・活動にエネルギーを与えたのはこの子(TNさん)だと思います。(・その子なりの生き物との関わりいうのがここに現れてきてるんだなあいうて思いましたね)

How does Support by Newswriter has Influence upon Learning Activities

Akiko Nishimori

Today, the public schools in Japan must create new their own curriculum according to National Curriculum2002. A lot of teaching plans (Leaning Unit) have been developed in schools, especially elementary schools.

We designed a learning unit in which students get some information about their community and write the sentence for newspaper. In that situation, Classroom teachers have no professional skills for newspaper writing,so they have to get along with a professional, and a Newswriter has to teach students as a professional.

In this article, the author analyzed the talk from Newswiter to students and the talk from Classroom teacher to students. And Classroom teacher had some reflections on whole learning activities and his experience about team-teaching with the Newswriter.

As a result of analysis of 'talk', Newswriter and Classroom teachers talked and taught about the different kind of things according to the topic each student was following.